

平成25（2013）年度
東京大学大学院学際情報学府学際情報学専攻
修士課程（社会情報学コース・一般選抜）
入学試験問題
専 門 科 目

（平成24年8月20日 14：00～16：00）

試験開始の合図があるまで問題冊子を開いてはいけません。開始の合図があるまで、下記の注意事項をよく読んでください。

1. これは、社会情報学コース・一般選抜の問題冊子である。
2. 本冊子の本文は8ページである。落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所などがあった場合には申し出ること。
3. 解答用紙は3枚ある。問題ごとに解答用紙1枚を使用すること。このほかにメモ用紙が1枚ある。なお、解答用紙のみが採点の対象となる。
4. 解答用紙の上方の欄に、問題の番号（例：「第1問」）、選択記号がある場合にはその記号（例：「第2問A」）及び受験番号を必ず記入すること。問題番号、選択記号及び受験番号を記入していない答案は無効とする。
5. 解答には必ず黒色鉛筆（または黒色シャープペンシル）を使用すること。
6. 解答は日本語によるものとする。
7. 試験開始後は、中途退場を認めない。
8. 本冊子、解答用紙、メモ用紙は持ち帰ってはならない。
9. 次の欄に受験番号と氏名を記入せよ。

受験番号	
氏 名	

社会情報学（一般選抜） 第1問

次の英文を読み、以下の問いに日本語で答えなさい。

下記出典の文章を掲載しています。

出典 Madrick J. (1998) ‘Computers: Waiting for the Revolution’, *The New York Review of Books*, Volume XLV, Number 5, March 26, p. 31

- (1) 下線部を日本語に訳しなさい。
- (2) 著者が第1文で提起している問いについて、著者が文章全体で述べている考えを400字程度でまとめなさい。
- (3) この文章が出版されたのは1998年であるが、2012年現在の諸状況を踏まえ、著者の考えについて賛否を明らかにした上であなたの意見を600字程度で述べなさい。

社会情報学（一般選抜） 第2問

以下の（A）から（F）までの中から1問を選択し、選択した問題の記号を解答用紙に明記の上、答えなさい。

- （A）近年の情報通信技術の発達に伴い、ビッグ・データ（big data）と称される巨大なデジタル・データの蓄積を分析して、ビジネス等にとって有用な価値をいかに引き出すかが、注目されている。ただ、そこでの個人情報への取扱いについても議論となっている。
- （1）まず、日本の個人情報保護法制の概要について、700字程度で説明しなさい。
- （2）次に、（1）で説明した法制度の下で、上記のデータの分析や利用において考えられる問題点とその対応策について、700字程度で論じなさい。
- （B）報道倫理に関して、多くの国々ではマスメディアの自主規制の制度や仕組みが設けられている。これについて以下の問いに答えなさい。
- （1）なぜそのような仕組みが設けられているのか、マスメディアの発達の歴史も踏まえて400字程度で論じなさい。
- （2）自主規制の具体例を挙げてその仕組みを説明し、その実効性と問題点について、500字程度で論じなさい。
- （3）自主規制以外に、メディアをよりよくする取り組みを挙げて、その実効性と問題点について、500字程度で論じなさい。

【（C）と（D）は次頁】

(C) 次の文章を読み、以下の問いに答えなさい。

民主主義とは人民が実際に支配することを意味するものでもなければ、また意味しうるものでもない。「人民」や「支配」という言葉に含まれるいかなる明白な意味からしても、そうである。民主主義という言葉の意味しうるところは、わずかに人民が彼らの支配者たらんとする人を承認するか拒否するかの機会を与えられているということのみである。しかるにこの決定でさえまったく非民主主義的な仕方になされうるのであるから、われわれの定義を限定するために、民主主義的方法であるか否かを識別するためさらに一步を進めた基準を付加せねばならぬ。すなわち、指導者たらんとする人々が選挙民の投票をかき集めるために自由な競争をなしうるということ、これである。そこで、このことの一側面は、民主主義とは政治家の支配であるということによっても表現されうるであらう。

(出典) ジョセフ・シュムペーター (中山伊知郎・東畑精一訳) 『新装版 資本主義・社会主義・民主主義』(東洋経済新報社、1995年)。

(原著) Joseph A. Schumpeter, *Capitalism, Socialism, and Democracy*, New York, Harper & Row, 1942.

- (1) 上記の議論は、民主主義をめぐる議論の系譜の中でどのように位置付けられるのか、600字程度で論じなさい。
- (2) SNS (Social Networking Service) の普及は、上記の議論に対してどのような修正を迫るのか、それとも迫らないのか、その理由も含めて、あなたの考えを800字程度で論じなさい。

(D) 自由貿易協定 (FTA) について、以下の問いに答えなさい。

- (1) 日本が FTA へ参加することをめぐって議論がなされているが、マクロ経済学的観点から、参加する場合のメリットとデメリットを比較して800字程度で論じなさい。ただし「全要素生産性 (TFP)」の語を用いながら論じること。
- (2) 仮に日本が FTA へ参加していく場合に、影響を受ける業種を特定した上で、当該影響の内容と当該業種において対応すべき課題について600字程度で論じなさい。

【(E) は次頁】

(E) 説得的コミュニケーションに関する以下の問いに答えなさい。

- (1) 実験参加者に対して、いくつかの争点に関して事前に意見を調査し、その後、それらの争点に対して、信憑性が高い情報源と低い情報源によるメッセージを読んでもらい、直後と4週間後に再び意見を調査した。以下の表からどのようなことが言えるかを300字程度でまとめなさい。

表 情報源の信憑性と意見調査の時期、意見が変化した人数の割合の関係(注1)

	信憑性の高い情報源		信憑性の低い情報源	
	直後	4週間後	直後	4週間後
メッセージが主張する方向に意見が変化した人数の割合	23.0%	12.3%	6.6%	14.0%

(注1) Hovland, C.I. and Weiss, W. (1951) The Influence of Source Credibility on Communication Effectiveness, *Public Opinion Quarterly*, 15: 635-650. から作成

- (2) 実験参加者に対して、ある争点に関するメッセージを提示して、それに対する態度を調査した。実験計画は、3要因2水準(争点への関与度(高/低)、メッセージの論拠の強さ(弱/強)、論拠の数(3/9))の参加者間計画である。図1、図2からわかることをまとめ、それをもとに考えられる説得的コミュニケーションのモデルについて600字程度で説明しなさい。

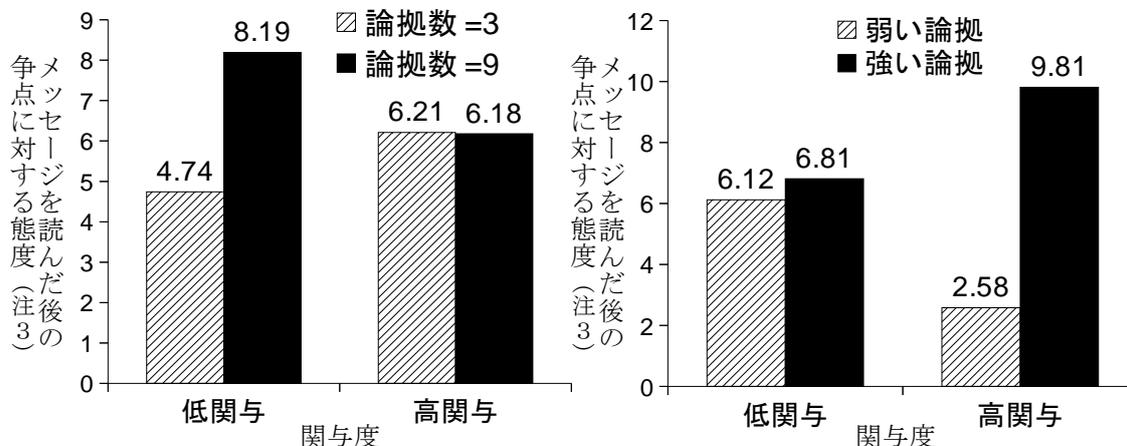


図1 争点への関与度と論拠数、メッセージを読んだ後の争点に対する態度の関係(注2)

図2 争点への関与度と論拠の強さ、メッセージを読んだ後の争点に対する態度の関係(注2)

(注2) Petty, R.E. and Cacioppo, J.T. (1984) The Effects of Involvement on Responses to Argument Quantity and Quality: Central and Peripheral Routes to Persuasion, *Journal of Personality and Social Psychology*, 46(1): 69-81. から作成

(注3) 4項目の態度評価(9段階(-4~4))の和の平均(値が高いほどメッセージの主張を肯定的に評価する程度が高い)

- (3) (1)の結果を(2)から考えられるモデルにもとづいて500字程度で説明しなさい。

【(F)は次頁】

(F) 次の文章を読み、以下の問いに答えなさい。

社会学のデータ分析方法論では、長い間「量的方法／質的方法」という二分法が自明視されてきた。量的方法とは、想定された母集団からサンプルをランダムかつ大量に抽出し、そのサンプルの平均値、(a)標準偏差、(b)中央値といった基本統計量から、母集団の分布を推計する手法である。社会学の場合、標準化された大規模な質問紙調査（クエッションナリー・サーベイ）を指すことが多い。他方、質的方法とは、事例研究、インタビュー、ドキュメント法など、統計的手法によらない分析である。（中略）社会調査法では、両者は対照的だが相互補完的な調査法と位置付けられることも多い。佐藤健二によれば、「量的／質的」という二分法そのものが戦後社会学の「冷戦体制」であり、問い直しの対象となる。私もこの問題提起には深く同意する。しかし量的調査と質的調査とでは、想定される社会の「全体」が異なることもたしかである。量的調査の全体とは、仮想される母集団の全体性であり、標本という「部分」から母集団という「全体」における、社会的属性や態度・意見など変数の分布を確率的に推測する。こうした想定であれば、変数の分布を通して、何が一般的で、何が特殊かを特定することもできる。これに対して質的調査、とりわけ生活史などのインタビュー調査が想定する全体性は性格を異にする。たとえば生活史では、それ自体は個別的でしかありえない一人一人の人生に関する記憶や語りを分析する。(c) 個別的な語りの中にこそ、誰もが普遍的に共有せざるをえない、社会や歴史の痕跡が刻まれると考えるのである。事例研究や参与観察が目指しているのも、同じことと考えていいだろう。つまり量的方法は「一般／特殊」という軸でものを考えるのに対し、質的方法是「個別／普遍」という軸で分析を構想する。個別を通してみいだされる普遍、これが質的調査の全体性である。

さて(d) 言説分析が、どちらの手法と似ているかは、なかなか微妙な問題である。

（出典）赤川学「言説の歴史を書く」盛山和夫・土場学・野宮大志郎・織田輝哉編著『＜社会＞への知／現代社会学の理論と方法（下）』勁草書房、2005年

- (1) 下線部(a)「標準偏差」、下線部(b)「中央値」について、あわせて300字程度で説明しなさい。
- (2) 下線部(c)「個別的な語りの中にこそ、誰もが普遍的に共有せざるをえない、社会や歴史の痕跡が刻まれると考える」とあるが、どうか。具体的な研究事例を挙げながら、400字程度で説明しなさい。

【(F) (3) は次頁に続く】

(3) 下線部(d)「言説分析が、どちらの手法と似ているかは、なかなか微妙な問題である」とあるが、①ミシェル・フーコーの言説分析を説明したうえで、②その方法論が「一般／特殊」「個別／普遍」という二つの軸とどのような関係にあるのかを、フーコーの著作に言及しつつ解説し、「どちらの手法と似ている」とあなた自身が考えるかを、700 字程度で論述しなさい。

社会情報学（一般選抜） 第3問

以下の(a)から(f)までの6つの群から一つの群のみを選択し、選択した群のアルファベット記号((a)～(f))を解答用紙に明記の上、その群に列記されている5つの用語のうち3つを選択して、選択した3つの用語の意味を、そのカナ記号((ア)～(オ))を記して、それぞれ400字程度で説明しなさい。

(a)

- (ア) 表現内容中立規制
- (イ) 放送法における番組調和原則
- (ウ) 検察審査会
- (エ) 不正指令電磁的記録に関する罪
- (オ) 商標権

(b)

- (ア) 韓流
- (イ) メディア企業のクロスオーナーシップ
- (ウ) 従軍ジャーナリズム (embedded journalism)
- (エ) ウォルター・リップマン (Walter Lippmann) のステレオタイプ
- (オ) ハフィントン・ポスト (*The Huffington Post*)

(c)

- (ア) リプセット (Seymour Martin Lipset) 仮説
- (イ) 権威主義体制 (authoritarian regime)
- (ウ) 国際政治学における構成主義 (constructivism)
- (エ) ガルトゥング (Johan Galtung) の構造的暴力 (structural violence)
- (オ) G20 サミット

(d)

- (ア) マイクロファイナンス
- (イ) 逆選択
- (ウ) ネットワーク外部性 (ネットワーク効果)
- (エ) 貨幣数量説
- (オ) 資産効果 (ピグー効果)

【(e)と(f)は次頁】

(e)

- (ア) ティチナー (P. J. Tichenor) らによる知識ギャップ仮説
- (イ) ベム (D. J. Bem) の自己知覚理論
- (ウ) ミルグラム (S. Milgram) の服従実験 (アイヒマン・テスト)
- (エ) デービソン (W.P. Davison) による第三者効果モデル
- (オ) グライス (P. Grice) による会話の含み (conversational implicature)

(f)

- (ア) 社会的包摂／排除 (social inclusion/exclusion)
- (イ) アクター・ネットワーク理論 (B. Latour)
- (ウ) 権威主義的パーソナリティ
- (エ) エスノメソドロジー
- (オ) 質問紙調査におけるダブルバーレル質問